

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第516号 2025年 3月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

定年退職の年にできること

東垣 美子

今年の三月で定年退職を迎えます。教師生活三十九年、無事に過ごせた恩返しとして、最後にできることはないものかと考えました。周りにいる若い先生たちから「国語の授業が思うようにいかない」という悩みをよく聞いていたので、最後に私自身も悩んだ国語の教材での研究授業をすることにしました。

六年生担任は八度目。「難しい。どうやって教えていこうか。」と悩み続けた単元『やまなし』。子どもたちに「国語を好きになってもらいたい」という思いで取り組みました。半分は、五年生からの持ち上がりなので、「自分たちで問いを作って問いから読み深める」というやり方で授業を進めて

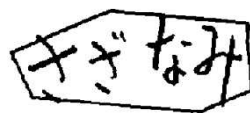
いくことができました。一人で考え、班で意見を出し合い、発表をしてみんなで深め合う。『やまなし』の授業に関しては、まず「宮沢賢治」について、かなり詳しく『イーハトーブの夢』を読み、場面ごとに「ここでの宮沢賢治さんのことをどう思いましたか」と考えました。そこからの『やまなし』だったため、子どもたちは、一生懸命、賢治がこの物語で何を伝えたかったのかを考えてくれました。

教室中、宮沢賢治と『やまなし』の掲示物でいっぱいになりました。丁寧に行ってきた結果、今までの中で、一番読み解けたことは言うまでもありません。その後、子どもたちからは、『やまなし』

の国語の授業があつて国語が好きになりました」とか、『やまなし』のおかげで、自分の意見が言えたり、自分の考えが詳しく書けたりできるようなりました」と大絶賛でした。

教える側が、一生懸命、意志を持って授業を行えば、子どもたちは、変わります。当然のことなのですが、そんな思いを改めてすることができました。「教師」という仕事についていろいろ言われているけれど、全く捨てたものではありません。退職の年を迎え、こんな魅力のある素晴らしい仕事はなかなかないものと改めて感じています。子ども達に元気をもらっているおかげで、まだまだ定年退職の年齢になったという事が自覚できていなのかもしれません。先日私の研究授業の講師として吉永先生に来て頂き、お話をした中で、「私もまだまだ担任をした」と思っていますよ。」という吉永先生のお言葉に、私もまだ頑張れそうだと共感できました。子ども達と毎日笑って過ごせるクラス作りを目指してきた三十九年間。あと少しで、一区切りの日を迎えます。まだまだ、この仕事を続けたいと感じながら…。

(宝塚市立末広小学校六年担任
主幹教諭)



▼卒業期を迎えた。6年生の国語科の教科書は「卒業するみなさんへ」という單元がある(光村図書)6年間を振り返り自分の成長を確かめること目的にして、「話す・聞く・書く・読む」ごとにチェックすることを求めている。記述として「こんな力がついて」「こんなときにかそう」を課題にしたページもある。続いて「生きる」(谷川俊太郎)「人間は他の生物と何が違うのか」(福岡伸一)締めくくりとなる▼加えて完結の後に48ページにわたる付録がつく。そこには、6年生、あるいは6年間で学習した大事なことが詰まっている。この価値ある内容である付録の扱いはどのようにするのだろうか▼6年生の国語科の授業時数が昭和43年245時間、平成10年180時間。教科書のページ数、小学校国語科全体で平成元年1321ページ。平成17年1422ページと増加傾向。授業時数が減り教科書のページ数が増える。6年生の3学期は付録まで含めるとどのような授業展開になっているのだろうか▼国が認める「置き勉」に、国語や算数の教科書が仲間に入っている子どもは、いたるところに「みつけよう」「考えよう」「伝え合おう」という学習自立への呼びかけがある。教科書の上質な活用を仕方を考えること。それが、学習の負担を軽減する特効薬を生み出すのであろう。

(吉永幸司)

『一年間続けてみた
詩づくり』
井上 滉斗

四月の初め、二年生の担任になるにあたり、『今年の一年間は音読指導に力を入れる』という自己目標を立てた。さざなみ国語教室の例会に一年間参加していく中で、『音読指導の大切さ』を再認識させられたからだ。

その目標を自分の中に掲げ、国語科の指導に取り組んだ。四月から気合いの入った私は、『ふきのとう(光村二年上)』の学習では、言語活動を『音読劇をしよう』に設定した。しかし、四月時点での、二年生の子どもの音読の力は弱かった。特に長い文を音読することへの不慣れであり、音読への抵抗感もあるように感じた。

そこで、音読に慣れたり、音読を意味あるものにしたりでできないかと考え、四月の音読カードの裏に『ほかほかことば』という私がつくったオリジナルの詩を載せた。教室で使ってほしい言葉を体裁よく並べてつくった簡単な詩だが、子どもたちは音読の宿題と一緒に、『ほかほかことば』という私がつくったオリジナルの詩を載せた。教室で使ってほしい言葉を体裁よく並べてつくった簡単な詩だが、子どもたちは音読の宿題と一緒に、『ほかほかことば』という言葉を、『いのうえひろとさく』という言葉が、子どもたちの音読への意欲を少し掻き立てていた。

【いのうえひろとさく一覽】

- 四月…『ほかほかことば』
- 五月…『ききかたあいづち名人』
- 六月…『どうしてがんばるの』
- 七月…『一緒(いっしょ)懸命(けんめい)』
- 八・九月…『当たり前す』
- 十月…『まもるのは だれのため』
- 十一月…『今のわたしをふりかえる』
- 十二月…『じんけんって なあに』
- 一月…『365ページ』
- 二月…『笑顔のまほう「ありがとう」』
- 三月…『思い出いっばい二年生』

この取り組みを続けていく中で、『先生、昨日は音読〇回読んできた』『次はどんなやつなん』という声が次第に増え、特に音読が苦手な子どもの抵抗感が小さくすることができた。また、初めは「音読をする前に「えー」と言っていた子が、次第に「音読すると、頭に言葉が入ってくる」と言って音読するようになった。

また、「担任の思い」を込めてつくった詩を音読することで、生徒指導面でも相乗効果が生まれ、学級経営にもつながった。お家の人や学童の指導員の方からも、『子どもが毎月紹介して読んでくれる。読んだことを子どもとふりかえる』と言ってもらえた。子どもたちの『音読の壁』を少しでも低くできた実践であった。

(豊郷町立日栄小学校)

考え学びを深める
6年生を目指して
畑中 翔太

6年生にとって小学校生活最後の物語教材「海の命」を読みました。子ども達はこの物語を読みどんなことを感じ、なにを受け取るのか気になりました。初読の感想からは子ども達の素朴な感想や疑問などが書かれており、読み進めていくことが楽しみになります。主な活動は、子どもから出た問いを元にみんなで話し合うことです。自分で問いについて考え、他者の意見も聞きながら学級全体で学びを深めたいと思ったからです。

話し合いを一部紹介します。(Tの思ったこと)

T …「なぜ、太一はクエを殺さなかったのでしょうか。」

C1…「クエをおとうだと思ったからです。」(T…なぜクエをおとうと思ったのかは、まだわからない)

T …「クエはおとうになったのかな。」(T…おとうがクエになったと考えている子への支援)

C2…「本当にクエになったわけではなくて、そう思っただけ。」(T…太一がなぜとどまったか考えた)

C3…「クエを殺しても、おとうは帰ってこないから。」(T…殺すことの意味について考えている。

T …「なるほど。太一は、命についてどんな捉え方をしているのかな。」

C4…「大事にしている。」

C5…「千匹に一匹がいい。」(T…与吉いさから学んだことと、瀬の主を追う気持ちにゆれる太一について考えたい。)

T …「そう思いながらも、おとうのことや、お母さんの思いも背負っている葛藤があるよね。」

C6…「私は、太一はクエを本当に殺したいと思っていたとは思わなくて、クエは太一にとっておとうを感じられる大切な存在だと思います。太一は幼少期からおとうのような立派な漁師になりたいという思いがあったから追い求めることとおとうに近づくということになっていったと思います。」(T…前の叙述をもとに考察している。)

話しの流れがずれる場面もありましたが、子ども達が意見を述べたり、悩みながら考えたり、友だちから新しい意見をもらったりして内容に向かう姿から、物語の世界に入り進んで学習に取り組む姿勢を感じました。

今後も物語の世界を想像したり登場人物の心情を叙述から考えたりしながら読書を楽しんでほしいことを伝えて物語の授業を終えました。

(大津市立田上小学校)

考えのよさを認め合う
「ありの行列」を通して

山田 定子

四月から、自分の感じたことや思ったことを伝え合い、その中で一人一人の感じ方などには違いがあることに気づけることをめざして学習を進めてきた。

まず、自分の考えや思いなどを友だちの前ではっきりと話せること。「くだ」と思います。くだ。ただで終わらずに、「文章のくだ」で、くだからくだに思いました。「くだからくだ」と思いました。」と、根拠を示して発表できるように話し方の学習を徹底した。

それから、友だちの意見をただ聞くのではなく、自分の考えや思いと似ているところ、違うところはどこかを考えながら聞くように指導した。そのために、話の聞き方のルール、メモのとり方などの学習を進めてきた。

物語文、説明文のどちらも、教科書の「問いをもと」を参考に学習にとりくんだ。学習の流れとして、

①自分の考えなどをまとめて書く。
②友だちの発表を聞き、似ているところや違うところを見つけて、

③見つけたことを発表する。
④友だちの発表を聞いて、自分の考えをふり返り、もう一度見直し

考えをふくらませる。この学習をくり返ししていった。三年生最後の説明文「ありの行列」では、誰もがよく知っているありを題材としているため、どの子も興味を持ちながら文章を読み

進めることができた。

まず、構成を捉え、内容を把握するのが大切である。「初め・中・終わり」の段落構成を捉える。行列のできる理由を「観察・実験↓仮説↓仮説の検証」という流れで書かれていたため、それぞれ段落の中心となる文やつながりを表す言葉に着目しながら、視写・言葉みつけなどの学習を通して、読み取りを行った。

次に、ありの行列に書かれていることを短くまとめる方法について交流した。最初に全体で、どういふふう学習するかを確認するため、一人の児童の発表を聞き、似ているところ、違うところを見つけ交流した。次に、グループでそれぞれが発表し、交流した。これをもとに、自分の考えをふり返り、修正した。

さらに「ありの行列」を読んで考えたこと、もっと知りたいことなどを「もっと読もう」や他の資料を参考にしてまとめ、文章に書いた。この学習後も、友だちの考えを聞いて、似ているところ、違うところなどを見つけて合い、一人一人の感じ方には違いがあることに気づけたようである。友だちの考えを聞いて、自分の考えに取り入れることもできるようになり、学習に深まりができたように感じている。

この学習をはじめた当初は、自分の考えを発表するだけで一杯だった子も、くり返し学習することで、学習の仕方が分かり、自分の考えをしっかりと持ち、友だちの考えのよさにも気づけるようになってきて、いい学習ができたと思っている。

(野洲市立北野小学校)

子どもたちと考えたい問い

川部 長人

現在、担任している二年生の子どもたちと、『スーホの白い馬(光村図書二年生)』の実践を行った。一年間の集大成の学習になるので、教材研究からいくつかの文献にあたり、入念に行なった。私が『スーホの白い馬』を初めて読んだときの感想は、「白馬が殺されて悲しいお話だな」ということを感じた。子どもたちに授業を行って行く上で、「悲しいお話だけで終わってしまっていないのか?」という自分の迷いがありながら、実践の方を行っていった。

単元目標としては「スーホの白い馬を読んで、心を動かされたところを伝え合おう」という目標で学習を行っていった。一時間目に初発の感想で、「心に強く残ったところ」について書かせ、交流を行った。多くの子たちが「白馬を殺されたところが、かわいそうで悲しいお話だ」という考えを書いていた。その中で、Aくんが「始めは幸せそう、最後殺されて悲しいお話だったけど、最後のところではよかったな」と思える場所もあった」という考えを発表した。何人かの子がAくんの考えに対して「実は私もそう思える部分があった」と発言し、クラスみんなで「スーホの白い馬で、よかったところ・悲しいだけじゃない部分はどこか?」をみんなで考えていこうということになった。

(野洲市立北野小学校)

一時間目でも深い読みをしている子が何人かいたが、今回はクラスのみんで考えていきたいと思

い、その後は音読と視写を中心に内容理解の学習を深め、八時間目の時にもう一度クラスみんなで「スーホの白い馬で、よかったところ・悲しいだけじゃない部分はどこか?」について考えてみることにした。Bくんからは、「白馬は殺されたが、馬頭琴を弾くたびに、白馬がスーホのすぐわきにいるような気がする」とやCさんからは、「どこへ行くときも、この馬頭琴を持って行ったという言葉に注目して、白馬は殺されて会えないが、馬頭琴となってスーホとずっと一緒にいられるところが、よかったと思える部分」という考えを発表していた。私も一度読んだときには「悲しいお話だな」という感想しか持てなかったが、子どもたちの考えを聞く中で、スーホの白い馬の読みがどんどん深まっていく感覚があった。単元の最後

に一番心を動かされた部分についてまとめたいが、「初め読んだときは、白馬が殺されて悲しいお話だな」と思っていたけど、友だちの考えを聞く中で、悲しいだけじゃないところにもたくさん気付けました。」と書いていた子もいた。

今回の実践を通して、子どもたちの学びには改めて問いが大切だということを感じた。問いにも質があり、今回の学習のようになん

なで考え読みが深まっていく問いを今後も考えていきたい。

(湖南市立菩提寺小学校)

豊かな読書生活を
北島 雅晴

「読書は強制するものではないので、読みたいと思うようになるまで、子どもに任せるべきだと思います。」

ある会合で、保護者が話された言葉です。半分は賛成ですが、子どもが本を手取るために、教師としての働きかけも必要ではないかと思えます。ただ見守るだけでは本を読まない子もいる。自主的に読みたくなるような手立てを生み出すのが教師の役割です。そのため、どんなことができるのか、本年度試みたことを紹介します。

①まずは、読み語りから
二年生を担任しています。週に三回程度は、読み語りの時間を設定します。十分ほどでよいので、子どもが興味をもちそうな本を選んで読みます。(高学年でもそうですが)読み語りを読書に向かう第一歩だと考えます。

②週一回、学校図書館に行く
月曜日に図書室に行き、本の返却と貸出を行っています。毎週行っている、十分ほどで返却と貸出が終了します。次にこの本を借りようと、決めている場合が多いからです。友達から紹介してもらった本を借りることも多くあります。自然に読書交流が生まれます。

③読書を家庭学習に位置づける
毎日「十分間読書」を家庭学習として位置付けています。それに併せて「読書の記録」をつけます。本の題名と読書時間(または読んだページ数)を記録するものです。読書が生活の一部になることを願って始めました。
「最近本をよく読むようになって。」
という保護者の声も聞かれるようになりました。

④課題読書
「生きもののひみつをしようかいしよう」の取り組み
子どもたちが読んでいる本をみてみると、偏りがあると感じます。自分が興味のある本をどんどん読めばそれでよいのですが、読書の範囲を広げるという視点から、今までにあまり手に取ったことのない本に触れる機会を作ってもよいのではないのでしょうか。

二年生の子どもたちは、生き物が大好きです。図書室にある生き物の本を読んで、「知らなかった」「すごいなあ」と思うことを見つけて、「読書紹介カード」に書いて知らせるといふ活動を設定しました。調べる読書の入り口のよう活動ですが、生き物のさまざまなひみつを紹介したいという思いが伝わってきました。

⑤課題読書
「名作を読む」の取り組み
学研(GAKKEN)及びポプラ社から、世界の名作のダイジェスト版が出版されています。「ふしぎの国のアリス」「あしながおじさん」といった本ですが、下学年が読むことができるように書かれたものもあり、興味を持てるのではないかと考え、学級に四十冊あまり置きました。これらの本の紹介をした後、子どもたちはめいめいに興味をもった本を手に取りました。その後、十五分程度、教室内は話し声もなく、真剣に読む姿が見られました。

①から⑤について、本年度は取り組んできました。どれもめずらしいことでもありませんが、「本を読むことが好きになった」といふ思いは、高まったのではないかと考えます。

「子どもたちは、あまり本を読まない。」

という先生の声を聞きますが、それならば、少しでも読書に関心をもてるような取り組みをしていく必要があります。その前提として、読書がなぜ大切なのか、教師がきちんとした考えをもつようにしたいです。

(野洲市立北野小学校)

編集後記

▼2月例会(第515回)は「第12

回近江の国語実践研究会(会場・滋賀県立県民交流センター)に共催団体として参加。研究主題「言語科の授業実践」▼実践報告「国語科の授業実践をつくる」(6年・田上小)の指導は畑中翔太さん(田上小)の指導の意図を、「自立した書き手」を指す文章の「型」が必要と考えた。型には、構成や言葉選び、表現技術などを盛り込んだ。思考・文章整理シートを活用した実践の提案。成果として単元の指導時間10時間。全員が5作品を書いたと貴重な実践であった。▼談話「言葉と生活をつなぐ作文教室」(滋賀県総合教育センター)川部裕さん(京都女子大学附属小)川部裕さん(善提寺小)三上さん(長人さん)の類文指導の意図を含めて、長年の経験の成功事例をもとに書くことの意味や方法について具体的な指導方法を示唆した。原石さんは「子供達を、感性的な作文をもつと、教師の言葉性を磨く必要があること」を提案した。川部さんは「表現の工夫」を話した。書き出しや書き方の実践についてであった。特に、作文の書き方の指導と巧みな表現を生み出す「オシャレな書き方」が印象に残る実践を披露した。▼講演「子どもに残る気の高まる国語教室」(吉永幸司)は、入門期における教科書の活用について。総括・川部隆徳さん(金勝小)は成果と課題についてまとめられた。▼巻頭には、東垣美子先生から、玉稿を頂きました。深謝。(吉永幸司)